

施工体制Q & A

令和7年2月

北海道建設部建設政策局

建設管理課

はじめに

このQ & Aは北海道発注の公共工事における施工体制についての基本的な考えを取りまとめたものです。

個別具体的な事例につきましては発注機関の判断を必要とする場合がありますので、ご不明な点等ありましたら、発注機関又は建設部建設管理課までお問い合わせください。

なお、作成に際しまして、国土交通省発行の「監理技術者制度運用マニュアル」を参考としていますので、あわせてご確認ください。

<監理技術者制度運用マニュアル(最終改正令和7年2月1日)>
https://www.mlit.go.jp/totikensangyo/const/sosei_const_tk1_000002.html

目 次

1. 建設業の許可

- Q1-1 建設業の「大臣許可」と「都道府県知事許可」とは、どう違うのか。
- Q1-2 「一般建設業」と「特定建設業」との違いは何か。
- Q1-3 一次下請業者が二次下請業者に発注する額が5,000万円を超える場合、一次下請業者も特定建設業の許可を受けていなければならないか。
- Q1-4 建設業の許可を要しない軽微な建設工事のみを請け負うことを営業するものとは何か。
- Q1-5 軽微な工事(500万円未満)は建設業許可がなくても請け負うことができるが、一次下請であるA社及びB社から二次下請として、それぞれの請負金額が500万円未満である場合、契約は可能か。
- Q1-6 経営事項審査とは何か。
- Q1-7 経営事項審査と競争入札参加資格との関連は、どのようなものか。
- Q1-8 Q1-1でいう建設業法上の営業所とは、どのようなものか。
また、一般競争入札の参加に必要な要件における営業所は、どのような扱いとなっているのか。

2. 主任技術者等の設置

- Q2-1 主任技術者及び監理技術者の設置が必要な工事とは何か。
- Q2-2 元請・下請を問わず、さらに請負金額の大小にかかわらず、必ず現場に「主任技術者」を置かなければならないとのことだが、全ての下請の建設工事が対象か。
- Q2-3 主任技術者及び監理技術者の職務は何か。
- Q2-4 主任技術者の資格要件は何か。
- Q2-5 監理技術者の資格要件は何か。
- Q2-6 監理技術者を補佐する制度が創設されたが、監理技術者補佐の資格要件は何か。
- Q2-7 専任する監理技術者は、監理技術者資格者証の交付を受けている者であればよいか。
- Q2-8 当初、主任技術者を設置した工事で、大幅な工事内容の変更等により、工事途中で下請契約の請負代金が5,000万円(建築一式工事の場合は8,000万円)以上となった場合、監理技術者を設置しなければならないか。
- Q2-9 日々の単価契約により行っているクレーン作業やコンクリートポンプ打設等に主任技術者等の設置が必要か。
- Q2-10 下請負に、レッカー作業、コンクリートポンプ打設、ガス圧接、かじ工を出しているが、下請

業者は主任技術者等を設置しなければならないか。

また、現場事務所の設置、電気及び水道などの仮設工事は主任技術者等を設置しなければならないか。

Q2-11 人材派遣会社から派遣された社員を主任技術者等とすることができるか。

Q2-12 Q2-11に示す、特例として恒常的な雇用関係を認める場合はどのような場合か。

Q2-13 新任の社員(転職してきた社員を含む)を主任技術者等とすることができるか。

Q2-14 今まで、技術者の身分確認として健康保険証を提示していたが、令和6年12月より健康保険証の新規発行がなくなった。今後どのような書類を提示したらよいか。また、証明書類は常時携帯していなければならないのか。

3. 主任技術者等の専任

Q3-1 主任技術者等の専任が必要な工事とは何か。

Q3-2 専任の主任技術者等は、一切現場から離れることはできないか。

Q3-3 専任の主任技術者の設置が必要な工事において、同一の主任技術者又は監理技術者が兼任できる要件とは何か。

Q3-4 Q3-3で示す建設業法第26条第3項第1号に基づく専任の主任技術者又は監理技術者が兼任できる要件とは何か。

Q3-5 Q3-3で示す建設業法施行令第27条第2項に基づく専任の主任技術者が兼任できる要件とは何か。

Q3-6 Q3-3で示す建設業法第26条第3項第2号に基づく専任の監理技術者が兼任できる要件とは何か。

Q3-7 監理技術者が工事を兼務しない場合でも補佐をつけることは可能か。

Q3-8 Q3-3で示す複数の工事を1つの工事とみなせるのはどんな場合か。

Q3-9 工場製作工事において、同一工場内で他の同種工事に係る製作がある場合、主任技術者等は2つの工事にそれぞれ配置されなければならないか。

Q3-10 Q3-9における「一元的な管理体制」とは、どのようなことか。

Q3-11 一次下請であるA社及びB社から当社は二次下請として契約したが、それぞれの請負金額が4,500万円未満である場合、主任技術者等は2つの工事を兼務してもよいか。

Q3-12 営業所技術者又は特定営業所技術者は、専任の主任技術者者や監理技術者として配置することはできないか。

Q3-13 営業所と工事現場が至近距離にあるため、営業所の専任技術者を主任技術者等として工事現場に従事させることはできないか。

Q3-14 経常建設共同企業体の構成員は、代表者であるなしにかかわらず、どのような工事でも主

任技術者等を専任で設置しなければならないか。

- Q3-15 経常建設共同企業体(乙型)の構成員は、それぞれの分担工事が稼働している期間のみそれぞれの主任技術者等を専任で設置することとしてよいか。
また、それぞれの分担工事の請負代金額によって、それぞれ主任技術者等を専任で設置することとしてよいか。

4. 主任技術者等の専任期間

- Q4-1 発注者と他機関との調整のため、工事を一時中止している期間は、主任技術者等の専任を解除できるか。
- Q4-2 工事現場への立入調査や施工計画の立案等の工事準備に未着手の場合、又は工事が完成し完成検査と事務手続が残っている場合の当該期間は、主任技術者等の専任を要しないか。
- Q4-3 工事が2次下請業者まで下請けされているが、2次下請業者が工事を行っている期間は、1次下請業者の主任技術者等は専任していなくてもよいか。
- Q4-4 工場製作を含んだ橋梁工事において、工場製作期間と現場における橋脚工事の期間が重複している場合、1人の主任技術者等の専任で構わないか。
- Q4-5 工場製作を伴う工事として、橋梁工事の他にどのような工事が該当するのか。
- Q4-6 維持工事等において長期間の契約工期となる場合、現場が稼働する時期があらかじめ特定されているものについては、フレックス工期制による工事の場合と同様の取扱いをしてもよいか。

5. 主任技術者等の交代

- Q5-1 配置した技術者を、工事途中で変更することができるか。また、変更できる場合、変更後の技術者についても3か月以上の雇用関係が必要なのか。必要な場合の3か月の始期はいつか。
- Q5-2 主任技術者等が死亡したため交代する必要性が生じたが、当社には現在、交代できる技術者がいないため、新たな技術者を雇用し専任の主任技術者等としたいと考えているが、この場合、入札の申込みのあった日以前等に3か月以上の雇用関係にない技術者を配置してよいか。
- Q5-3 トンネル・ダム工事等の大型工事で、1つの契約工期が多年に及ぶ場合、1年単位で主任技術者等を交代させてよいか。
- Q5-4 専任の主任技術者等が短期間現場を離れる場合、発注者との協議が不要なケースは、どのような場合か。
- Q5-5 専任の監理技術者が、新たに受注した他の工事の監理技術者を兼任することとなった場合は途中交代となるか。
また、届出は必要か。

6. 現場代理人

- Q6-1 現場代理人の職務及び資格要件は何か。
- Q6-2 人材派遣会社から派遣された社員を現場代理人とすることができるか。
- Q6-3 主任技術者等と現場代理人とは同一の場合が多いが、短期間であれば現場を離れても現場代理人交代手続をとらず、協議簿処理でよいケースは、どのような場合か。
- Q6-4 発注者と他機関との調整等のため、工事を一時中止している期間や工事の完成(完成届提出)後、引渡完了までの間、他の工事の現場代理人になることができるか。
- Q6-5 契約約款には、「現場代理人の工事現場における運営及び取締りに支障がなく、かつ、発注者との連絡体制が確保されると認められた場合には、工事現場における常駐を要しないこととすることができる」とあるが、具体的には、どのような場合か。
- Q6-6 現場代理人が、他の工事の現場代理人を兼任することができるときは、どのような場合か。
- Q6-7 「現場代理人の兼任に関する取扱い」において、兼任の条件として、「受注者は現場代理人を兼任するそれぞれの工事に受注者の社員等で確実に連絡が可能である連絡員を定め」とあるが、社員等の「等」とは何を指すのか。
- Q6-8 専任の主任技術者の設置が必要な工事で、専任の主任技術者が現場代理人を兼ねている場合は、他の工事の現場代理人を兼任することはできないのか。
また、専任の主任技術者を兼ねていない現場代理人が、他の工事の現場代理人を兼任することはできるのか。
- Q6-9 建設業法施行令第27条第2項により密接な関係のある工事について同一の専任の主任技術者が管理できるとされた2件の工事で現場代理人を兼任しているが、1件において監理技術者の設置が必要な工事となった場合は、現場代理人を兼任できるか。
- Q6-10 監理技術者が現場代理人を兼ねている場合は、他の工事の現場代理人を兼任することはできないのか。
また、監理技術者を兼ねていない現場代理人を他の工事の現場代理人と兼任することはできるのか。
- Q6-11 道の工事における現場代理人と道以外の地方公共団体等の工事の現場代理人を兼任することは可能か。
- Q6-12 4,500万円未満の工事で、工事場所が同一市町村内にある、道発注工事2件を同時に受注したが、2件の工事について一人の現場代理人が兼任することは可能か。
- Q6-13 現場代理人を兼任させようとする場合は、「現場代理人の兼任届」を支出負担行為担当者に提出することとなっているが、提出先はどこか。
- Q6-14 現場代理人が監理技術者補佐を兼ねることは可能か。
- Q6-15 現場代理人が、2つの工事を兼任する監理技術者を兼ねることは可能か。
- Q6-16 監理技術者が現場代理人を兼ねている場合で、新たに他の工事の監理技術者を兼任する場合は引き続き現場代理人を兼ねることは可能か。
- Q6-17 監理技術者補佐を配置した場合における現場代理人の兼務について、次の事例の場合は兼務を認められるか。

- ・事例1 工事① 監理技術者A 監理技術者補佐B 現場代理人A
工事② 監理技術者A 監理技術者補佐C 現場代理人A
- ・事例2 工事① 監理技術者A 監理技術者補佐B 現場代理人B
工事② 監理技術者A 監理技術者補佐C 現場代理人C
- ・事例3 工事① 監理技術者A 監理技術者補佐B 現場代理人A
工事② 監理技術者A 監理技術者補佐C 現場代理人C

7. 下請負

- Q7-1 警備会社と契約し、交通整理員の派遣を受けたが、これは下請契約となるか。
- Q7-2 舗装工事などで広く用いられているオペレーター付きリース契約は、下請契約となるか。
- Q7-3 ダンプトラックによる残土搬出作業を契約したが、下請契約となるか。
- Q7-4 他の建設会社から作業員の労務提供を受けたが、これは下請契約となるか。
- Q7-5 資材メーカーにブロックの製造と、資材置き場までの搬入を内容とする契約をしたが、これは下請契約となるか。
また、資材置き場までの搬入ではなく、トラッククレーンによる現場へのブロック設置までを内容とする契約をした。この場合は下請契約となるか。
- Q7-6 同一入札参加者と下請契約を締結することはできるか。
- Q7-7 協力会社に工事への協力を求める場合、下請届けは必要か。
- Q7-8 共同企業体を下請とした契約を締結することはできるか。
- Q7-9 3社で共同企業体を組んでいるが、その構成員へ下請けさせることは問題があるのか。
- Q7-10 上請けは禁止されているのか。

8. 一括下請負

- Q8-1 一括下請負とは何か。
- Q8-2 外注の比率が何%なら一括下請負となるのか。
- Q8-3 工事の中に含まれる特殊工事を専門工事業者に下請けさせることは、一括下請負となるのか。
- Q8-4 元請の実質的な関与とは、どこまでの範囲をいうのか。
- Q8-5 元請が実質的に関与していることの確認は、どのような方法で行うのか。
- Q8-6 元請から1次、2次、3次下請までである場合、一括下請負が禁止される範囲はどこまでか。
- Q8-7 元請負人が現場管理と資機材の手配供給のみを行い、実質の施工を全て下請けした場合、一括下請負と判断されるか。

Q8-8 施工管理、工程管理などの全てに関与することによって一括下請負に該当しないとあるが、その「全て」のうち1つでも行わなかった場合、一括下請負と判断されるのか。

9. 施工体制台帳等

Q9-1 施工体制台帳は、少額の契約のものや、施工期間の極めて短いものでも全て作成する必要があるか。

Q9-2 施工体制台帳等に記載する下請負人の範囲はどこまでか。

Q9-3 施工体制台帳への下請契約の記載は、全ての下請業者とされているが、3次、4次の業者は契約書を交わしていない業者がほとんどであり、全ての下請業者を記載すると書類提出が遅れることになるが、1次までの記載ではだめなのか。

Q9-4 専門工事業者と取り引きする際に、専門工事請負基本契約約款により契約を締結しているが、各工事の請負代金額が100万円未満の場合、基本契約約款に基づき請求書を受領し、請求代金を支払っているため、施工体制台帳には契約書なしと記載してよいか。

Q9-5 作業員名簿は施工体制台帳に添付しなければいけないか。また、下請業者を含む全員の名簿を作成しなければならないか。

Q9-6 施工体系図は、工事関係者・公衆が見やすい場所に掲示することとされているが、施工体系がなかなか決まらなかったり、変更が多くあったりする。施工体系図は工事施工後すぐに掲示しなければならないか。

また、変更がある場合は、すぐに訂正し貼り替えなければならないか。

1. 建設業の許可

Q1-1

建設業の「大臣許可」と「都道府県知事許可」とは、どう違うのか。

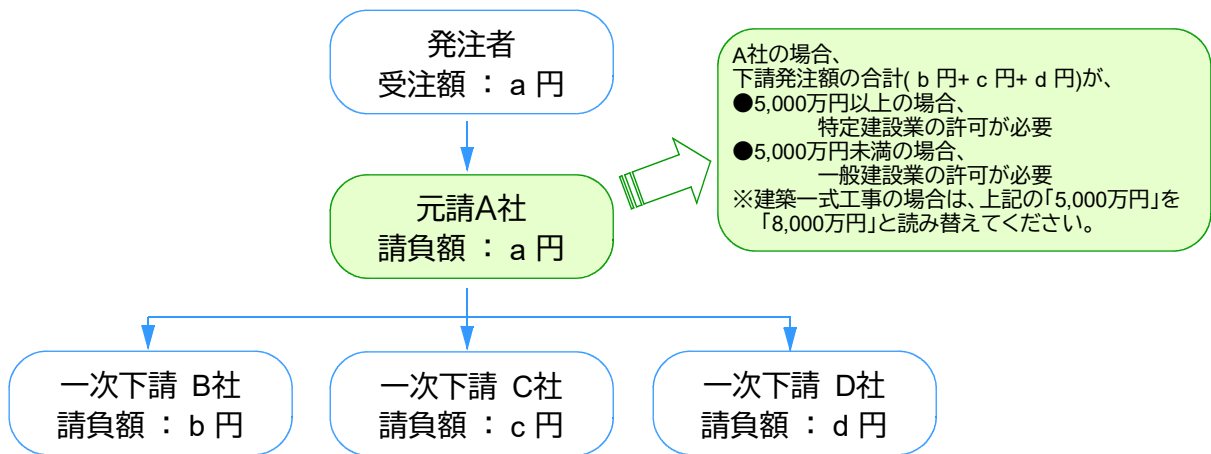
A: 建設業を営む場合には、建設業法による建設業の許可を受けることが必要であり、その許可には、「大臣許可」と「都道府県知事許可」の二種類があり、二以上の都道府県の区域に営業所を設けて営業しようとする場合は国土交通大臣、一の都道府県内にのみ営業所を設けて営業しようとする場合には当該営業所の所在地を管轄する都道府県知事の許可を受ける必要があります。

Q1-2

「一般建設業」と「特定建設業」との違いは何か。

A: 建設業の許可は、「一般建設業」と「特定建設業」に区分され、軽微な工事のみを請け負って営業する場合を除き、建設業を営む者は、元請、下請を問わず許可を受けようとする業種ごとに、一般建設業又は特定建設業の許可を受けなければなりません。

どちらの許可も建設工事の発注者から直接請け負う請負金額には制限がありませんが、発注者から直接請け負った一件の建設工事について、下請代金の額(その工事に下請契約が2以上あるときは、下請代金の総額)が5,000万円(建築一式工事の場合は8,000万円)以上となる下請契約を締結して工事を施工する者は、特定建設業の許可を受けなければなりません。



Q1-3

一次下請業者が二次下請業者に発注する額が5,000万円を超える場合、一次下請業者も特定建設業の許可を受けていなければならないか。

A: 下請発注額によって特定建設業の許可が必要とした要件は、元請業者に対してのみ求めているものです。一次下請以下と契約している建設業者については、このような制限はありません。そのため、一次下請業者が二次下請業者に対して発注する額に制限がなく、また、その発注額による特定建設業、一般建設業の条件もありません。

なお、公共事業の適正な執行を図るためには、国交省の「建設産業における生

産システム合理化指針」において下請業者の選定基準が示されていますので、それに従って選んでください。

Q1-4

建設業の許可を要しない軽微な建設工事のみを請け負うことを営業するものとは何か。

A: 建設業法上では、「建設業者＝建設業許可業者」と「建設業を営む者＝許可を受けている・許可を受けていない者を問わず、全ての建設業を営む者」との用語の使い分けをしており、次のような軽微な建設工事のみを請け負うことを営業とする者は、建設業の許可を受けなくても建設業を営むことができます。

- ・建築一式工事⇒1,500万円に満たない工事又は延べ面積150㎡に満たない木造住宅工事
- ・その他の工事⇒500万円に満たない工事

Q1-5

軽微な工事(500万円未満)は建設業許可がなくても請け負うことができるが、一次下請であるA社及びB社から二次下請として、それぞれの請負金額が500万円未満である場合、契約は可能か。

A: A社、B社とのそれぞれの再下請負の金額が500万円未満ならば、どちらも契約が可能です。

なお、一次下請A社と独立した工種ごとに契約をし、個別には500万円未満だが合計すると500万円以上になる場合や、工事の工期が長期間の場合で、500万円未満の工事を請け負った後、再度500万円未満の工事を請け負い、合計すると500万円以上となる場合においては、軽微な工事の範囲にはなりません。

Q1-6

経営事項審査とは何か。

A: 建設工事の適正な施行を確保するため、建設業法による最低必要条件としての許可制度が設けられていますが、それに加えて工事の規模や施工技術など具体的な工事においては要求する技術水準などが違うため、これに見合う建設業者を選定するため設けられた制度です。

このため、公共性のある施設又は工作物に関する建設工事(以下「公共工事」という。)を発注者から直接請け負おうとする建設業者は、その経営に関する客観的事項について、建設業の許可を受けた国土交通大臣又は都道府県知事の審査を必ず受けなければなりません。経営事項審査の義務付けの対象となる公共工事は、国、地方公共団体、法人税法別表第1の公共法人及び特殊法人等が発注者で、工事1件の請負代金が建築一式工事にあつては1,500万円以上、その他の建設工事にあつては500万円以上のものです。

また、注意が必要なのは、道と建設工事の請負契約をする場合は、その契約時点で有効な経営事項審査の結果通知を有していなければ道と契約を結ぶことはできません。もし、有効な結果通知を有せずに入札に参加し落札した場合は、違約

金(契約額の5%)を課すとともに、一定期間指名停止することとなります。

Q1-7

経営事項審査と競争入札参加資格との関連は、どのようなものか。

A: 道が発注する建設工事の入札に参加する場合は、あらかじめ建設業許可通知書や経営事項審査等の申請書類を道へ提出し、競争入札参加資格審査を受ける必要があります。建設工事に係る競争入札参加資格のうち、「農業土木工事」「水産土木工事」「森林土木工事」「一般土木工事」「舗装工事」「建築工事」「電気工事」「管工事」の8資格については、経営事項審査の結果等を用いて格付を行っています。

Q1-8

Q1-1でいう建設業法上の営業所とは、どのようなものか。

また、一般競争入札の参加に必要な要件における営業所はどのような扱いとなっているのか。

A: 建設業法において営業所とは、建設業に関する営業に実質的に関与する本店又は支店若しくは常時建設工事の請負契約を締結する事務所のことです。

常時請負契約を締結する事務所とは、請負契約の見積、入札、狭義の契約締結等、請負契約の締結にかかる実体的な行為を行う事務所をいいます。

営業所としての最低限度の要件は、

- ・契約締結に関する権限を委任されていること
- ・事務所など建設業の営業を行うべき場所を有していること
- ・電話、机等什器備品を備えていること
- ・一般建設業ではQ2-3の資格を持つ技術者を専任で置くこと
- ・特定建設業ではQ2-4の資格を持つ技術者を専任で置くことが必要です。

また、道の一般競争入札の参加に必要な要件としては、建設業法における営業所が指定する地域内にあることや、建設業許可申請書別表の主たる営業所欄に記載されている主たる営業所が指定する地域内にあることなど、それぞれの入札ごとに参加要件を定めています。

2. 主任技術者等の設置

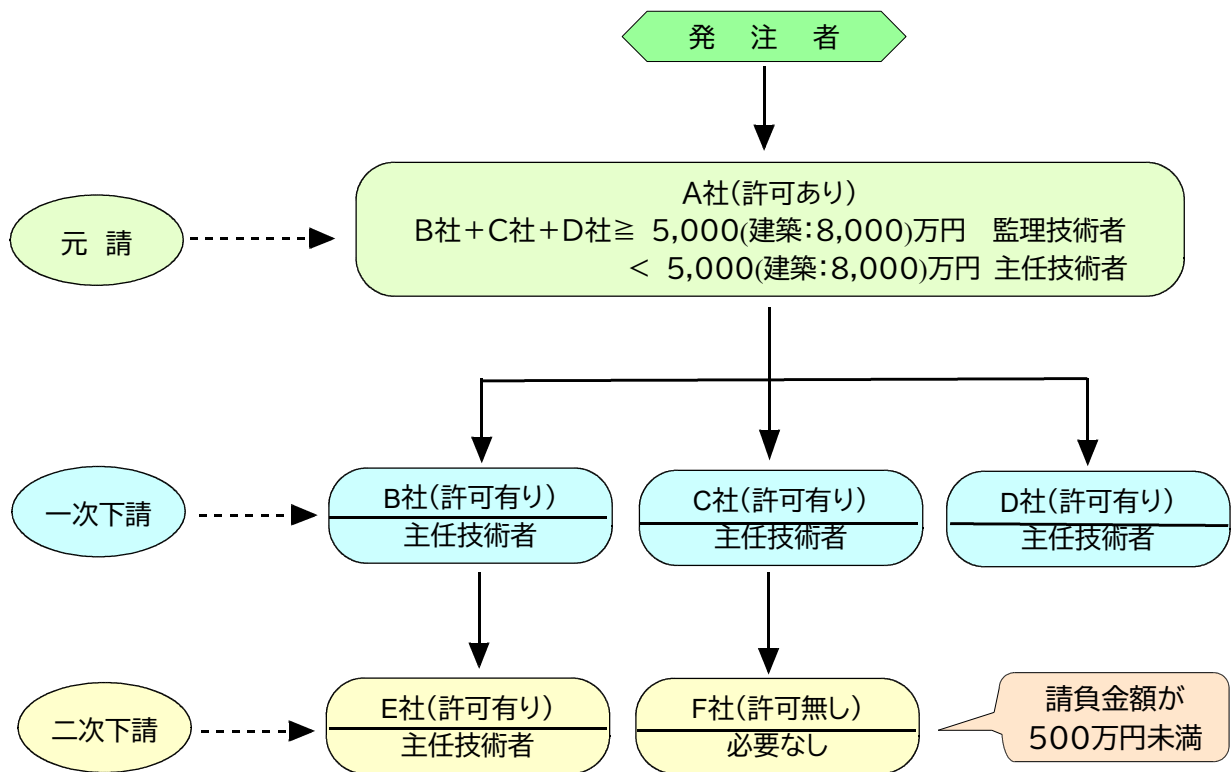
Q2-1

主任技術者及び監理技術者の設置が必要な工事とは何か。

A: 建設業の許可を受けている建設業者は、請け負った工事を施工する場合には、許可区分が特定・一般を問わず、また、元請・下請を問わず、さらに請負金額の大小にかかわらず、工事施工の技術上の管理をつかさどるものとして、必ず現場に「主任技術者」を置かなければなりません。

また、発注者から直接工事を請け負い、そのうち5,000万円(建築工事業の場合は8,000万円)以上を下請契約して工事を施工するときは、特定建設業の許可を受けていなければならない、主任技術者に替えて、監理技術者を置かなければなりません。

現場技術者の配置例



Q2-2

元請・下請を問わず、さらに請負金額の大小にかかわらず、必ず現場に「主任技術者」を置かなければならないとのことだが、全ての下請の建設工事が対象か。

A: 下請工事のうち、特定専門工事である「型枠工事」及び「鉄筋工事」においてのみ、元請又は上位下請（以下「元請等」という。）業者が置く主任技術者が自らの職務と併せて、直接契約を締結した下請（建設業者である下請に限る。）業者の主任技術者が行うべき職務を行うことを、元請等及び当該下請業者が書面により合意した場合は、当該下請業者に主任技術者を置かなくてもよいこととされています。

なお、この特定専門工事については、元請等業者が本工事を施工するための下請契約の請負代金が4,500万円未満のもの（下請契約が2以上あるときは合計額）が対象となります。

また、特定専門工事において元請等業者が置く主任技術者は、当該特定専門工事と同一の種類 of 建設工事に関し一年以上の指導監督的な実務の経験を有すること、当該特定専門工事の工事現場に専任で置かれることが要件となります。

この「指導監督的な実務の経験」とは、工事現場主任者、工事現場監督者、職長などの立場で、部下や下請業者等に対して工事の技術面を総合的に指導・監督した経験が対象となります。

Q2-3

主任技術者及び監理技術者の職務は何か。

A： 主任技術者及び監理技術者は、建設工事の施工に当たり、その施工計画を作成し、具体的な工事の工程管理や工事目的物、工事仮設物、工事用資材等の品質管理を行うとともに、当該建設工事の施工に従事する者の技術上の指導監督を行います。

なお、監理技術者については、建設工事の施工に当たり外注する工事（下請負）についても、施工を担当する全ての専門工事業者等を適切に指導・監督するという総合的な機能を果たすことが求められています。

Q2-4

主任技術者の資格要件は何か。

A： 建設工事の現場においては、一定の資格又は実務経験を有する主任技術者を設置することが必要で、以下に該当する者をいいます。

（一般建設業の営業所の専任の技術者の資格要件と同一）

（1）下記の実務経験を有する者

- | | |
|---------------------|-------|
| ① 高等学校の指定学科卒業後 | 5年以上 |
| ② 高等専門学校・大学の指定学科卒業後 | 3年以上 |
| ③ 上記以外の学歴の場合 | 10年以上 |

（2）1級及び2級施工管理技士等の国家資格者等

Q2-5

監理技術者の資格要件は何か。

A： 建設工事の現場においては、一定の資格又は実務経験を有する監理技術者を設置することが必要で、以下に該当する者をいいます。

（特定建設業の営業所の専任の技術者の資格要件と同一）

（1）指定建設業

- ① 1級施工管理技士等の国家資格者
- ② 国土交通大臣が①と同等以上の能力を有すると認定した者

（2）指定建設業以外

- ① 1級施工管理技士等の国家資格者
- ② 主任技術者の要件のいずれかに該当する者のうち、発注者から直接請け負った金額が4,500万円以上の工事に関して2年以上指導監督的な実務経験を有する者
- ③ 国土交通大臣が①又は②と同等以上の能力を有すると認定した者

許可を受けている業種	指定建設業(7業種) 土木一式、建築一式、 管工事、鋼構造物、舗装、電気、造園			その他 (左以外の22業種)			
	特 定		一 般	特 定		一 般	
建設業許可	許可の種類						
工事現場の技術者	元請工事における下請金額合計	5,000万円※以上	5,000万円※未満	5,000万円※以上は下請契約できない	5,000万円※以上	5,000万円※未満	
	5,000万円※以上は下請契約できない						
	工事現場に置くべき技術者	監理技術者	主任技術者		監理技術者	主任技術者	
	技術者の資格要件	①1級国家資格者 ②大臣特別認定者	①1級・2級国家資格者 ②登録基幹技能者等 ③指定学科+実務経験(3年または5年) ④実務経験(10年)		①1級国家資格者 ②指導監督的な実務経験者	①1級・2級国家資格者 ②登録基幹技能者等 ③指定学科+実務経験(3年または5年) ④実務経験(10年)	
	技術者の専任	◎ 公共性のある工作物に関する建設工事で、請負金額が4,500万円以上の時に必要					

※建築一式工事の場合は8,000万円

Q2-6

監理技術者を補佐する制度が創設されたが、監理技術者補佐の資格要件は何か。

A: 監理技術者補佐は、以下に該当する者をいいます。

(1) 監理技術者の資格要件を満たす者(Q2-5参照)

(2) 主任技術者の資格要件を満たす者(Q2-4参照)のうち、1級の技術検定の第一次検定に合格した者。

Q2-7

専任する監理技術者は、監理技術者資格者証の交付を受けている者であればよいか。

A: 発注者が国、地方公共団体又は公共法人等の建設工事について、元請業者が当該工事現場に専任で配置する監理技術者は、元請業者と直接的かつ恒常的な雇用関係にあるもので、監理技術者資格者証の交付を受けている者であって、かつ監理技術者講習を過去5年以内に受講した者となっています。

また、この監理技術者資格者証については、担当している工事がある場合は、常に携帯していなければなりません。

監理技術者資格者証

(表面)

氏名	年月日生		
住所			
写 真	初回交付	年月日	交付
	年月日	交付	年月日
	交付番号	第	号
	監理技術者資格者証		
令和 年 月 日 まで有効			
国土交通大臣 指定資格者証交付機関代表者			印
所属建設業者	許可番号		
有する資格			
建設業の種類	土木一式と石屋電管が鋼筋コンクリート造の建築物の建築工事及び水道工事		
有・無			

(裏面)

監理技術者講習 習修了 履歴	修了番号・第	号	修了年月日:
	氏名:	生年月日:	
講習実施機関名:		印	
資格者証備考			

Q2-8

当初、主任技術者を設置した工事で、大幅な工事内容の変更等により、工事途中で下請契約の請負代金が5,000万円(建築一式工事の場合は8,000万円)以上となった場合、監理技術者を設置しなければならないか。

A: 工事内容の大幅な変更等により下請契約の請負代金額の合計が5,000万円以上となった場合は、発注者から直接建設工事を請け負った特定建設業者は、主任技術者に代えて、所定の資格を有する監理技術者を設置しなければなりません。
一般的には施工計画の作成などにより、あらかじめ下請金額が想定されるので、工事施工当初においてこのような変更が予想される場合には、当初から監理技術者になり得る資格を持つ技術者を設置しておくとともに、特例監理技術者を置く場合は併せて監理技術者補佐となり得る資格を持つ技術者を配置しておくことが必要です。

Q2-9

日々の単価契約により行っているクレーン作業やコンクリートポンプ打設等に主任技術者等の設置が必要か。

A: 建設業法第24条で、「委託その他何らの名義をもってするを問わず、報酬を得て建設工事の完成を目的として締結する契約は建設工事の請負契約とみなして、この法律を適用する。」と規定されています。
単価契約であっても作業内容が建設工事の請負契約に該当しますので、主任技術者等の設置が必要です。

Q2-10

下請負に、レッカー作業、コンクリートポンプ打設、ガス圧接、かじ工を出しているが、下請業者は主任技術者等を設置しなければならないか。

また、現場事務所の設置、電気及び水道などの仮設工事は主任技術者等を設置しなければならないか。

A: 契約内容が建設工事である場合は、下請業者であっても主任技術者を設置しなければなりません。
仮設工事等であっても建設工事であれば主任技術者等を専任又は兼任で設置しなければなりません。

Q2-11

人材派遣会社から派遣された社員を主任技術者等とすることができるか。

A: 直接的かつ恒常的な雇用関係がなければ、主任技術者等とすることはできません。

直接的雇用関係とは、技術者とその所属建設業者との間に第三者の介入する余地のない雇用に関する一定の権利義務関係が存在することをいい、資格者証、健康保険被保険者証等により建設業者との雇用関係が確認できることが必要なので、在籍出向者、派遣社員については直接的な雇用関係にあるとはいえません。

また、恒常的な雇用関係とは、当該企業に勤務し、日々一定時間以上勤務に従

事することが担保されていることに加え、企業及び技術者が双方の持つ技術力を熟知し、企業が責任を持って技術者を配置できるとともに、技術者が円滑に企業の持つ技術力を活用できることが必要です。

道から直接請け負う建設業者の専任の主任技術者等については、建設業者から入札の申し込みがあった日（指名競争に付す場合であって入札の申込を伴わないものにあつては入札の執行日、随意契約による場合にあつては見積書の提出のあった日）以前に3か月以上の雇用関係が必要です。

ただし、震災等の自然災害の発生又はそのおそれにより、最寄りの建設業者により即時に対応することがその後の発生又は拡大を防止する観点から最も合理的であつて、当該建設業者に要件を満たす技術者がいない場合など、緊急の必要その他やむを得ない事情がある場合については、この限りではありません。

なお、技術者の所属の変更後3か月に満たない場合でも、変更前後の建設業者の関係により、特例として変更後の建設業者との間に恒常的な雇用関係にある者とみなす場合があります。（Q2-12）

Q2-12

Q2-11に示す、特例として恒常的な雇用関係を認める場合はどのような場合か。

A： 次のような場合でそれぞれ条件を満たしたとき、特例が認められます。

①官公需適格組合における組合員から組合へ出向する場合。

<組合の条件>

- (1)建設業法に定める建設業者であること。
- (2)官公需適格組合の証明を受けていること。

<組合員の条件>

- (1)建設業法に定める建設業者であること。
- (2)経営事項審査を受けていないこと。
- (3)主たる営業所の所在地が組合の所在地と同一都道府県内にあること。

②持株会社である親会社と子会社間で出向する場合。

- (1)親会社、子会社ともに国土交通大臣から認定を受けた同一の企業集団に属していること。
- (2)当該工事の下請負人として、当該親会社又は同一企業集団に属している他の子会社を選定しないこと。
- (3)親会社又は全ての連結子会社の、いずれか一方が経営事項審査を受けていない者であること。

③営業譲渡又は会社分割により暫定的に譲渡（又は分割）先の企業へ出向する場合。

- (1)営業譲渡の契約上定められている譲渡の日又は会社分割の登記をした日から3年以内であること。
- (2)出向元企業が当該工事の建設業の許可を廃止していること。

Q2-13

新任の社員（転職してきた社員を含む）を主任技術者等とすることができるか。

A: Q2-11のとおり、入札の申し込みの日などから3か月以上の雇用がなければ主任技術者等とすることはできません。

Q2-14

今まで、技術者の身分確認として健康保険証を提示していたが、令和6年12月より健康保険証の新規発行がなくなった。今後どのような書類を提示すればよいか。また、証明書類は常時携帯していなければならないのか。

A: 建設工事の適正な施工を確保するため、監理技術者等については、当該建設業者と直接的かつ恒常的な雇用関係にある者であることが必要です。

発注者は契約当初にこのような雇用関係について、次のいずれかの書面により確認します。なお、技術者が常備携帯している必要はありません。

- ・既発行の健康保険被保険者証(有効なものに限る)
- ・監理技術者資格者証の裏書
- ・住民税特別徴収額通知書
- ・健康保険・厚生年金被保険者標準報酬決定通知書
- ・所属会社の雇用証明書
- ・その他これらに準ずる資料

3. 主任技術者等の専任

Q3-1

主任技術者等の専任が必要な工事とは何か。

A: 公共性のある施設若しくは工作物に関する建設工事(個人住宅などを除くほとんどの工事が該当します。)で、請負金額が4,500万円(建築一式工事の場合は9,000万円)以上の工事を施工しようとする場合は、より適正な施工を確保するために、主任技術者又は監理技術者を工事現場ごとに専任で置く必要があります。

「現場ごとに専任」とは、他の工事現場の「主任技術者」、「監理技術者」又は「監理技術者補佐」及び「営業所技術者」又は「特定営業所技術者」との兼任を認めないことを意味し、元請・下請負にかかわらず、常時継続的に当該工事現場に係る職務にのみ従事していることをいいます。

公共性のある施設若しくは工作物（建設業法施行令第27条第1項）

- ①国又は地方公共団体が注文者である施設又は工作物に関する建設工事
- ②鉄道、軌道、索道、道路、橋、護岸、堤防、ダム、河川に関する工作物、砂防用工作物、飛行場、港湾施設、漁港施設、運河、上水道又は下水道に関する建設工事
- ③電気事業用施設（電気事業の用に供する発電、送電、配電又は変電その他の電気施設をいう。）又はガス事業用施設（ガス事業の用に供するガスの製造又は供給のための施設をいう。）に関する建設工事
- ④石油パイプライン事業法（昭和四十七年法律第五号）第五条第二項第二号に規定する事業用施設、電気通信事業法（昭和五十九年法律第八十六号）第二条第五号に規定する電気通信事業者（同法第九条第一号に規定する電気通信回線設備を設置するものに限る。）が同条第四号に規定する電気通信事業の用に供する施設、放送法（昭和二十五年法律第三百二十二号）第二条第二十三号に規定する基幹放送事業者又は同条第二十四号に規定する基幹放送局提供事業者が同条第一号に規定する放送の用に供する施設（鉄骨造又は鉄筋コンクリート造の塔その他これに類する施設に限る。）、学校、図書館、美術館、博物館又は展示場、社会福祉法（昭和二十六年法律第四十五号）第二条第一項に規定する社会福祉事業の用に供する施設、病院又は診療所、火葬場、と畜場又は廃棄物処理施設、熱供給事業法（昭和四十七年法律第八十八号）第二条第四項に規定する熱供給施設、集会場又は公会堂、市場又は百貨店、事務所、ホテル又は旅館、共同住宅、寄宿舎又は下宿、公衆浴場、興行場又はダンスホール、神社、寺院又は教会、工場、ドック又は倉庫、展望塔に関する建設工事

Q3-2

主任技術者等の専任が必要な工事は、一切現場から離れることはできませんか。

A: 「専任」とは、必ずしも工事現場への「常駐」を必要とするものではなく、当該建設工事に関する打ち合わせや書類作成等の業務に加え、技術研鑽のための研修、講習、試験等への参加、休暇の取得、働き方改革の観点を踏まえた勤務体系その他合理的な理由で、短期間（1～2日程度）工事現場を離れることについて、その間の施工内容を踏まえ適切な施工ができる体制を確保することができる場合は差し支えありません。

それを超える期間現場を離れる場合、終日現場を離れている状況が週の稼働日の半数以上の場合、周期的に現場を離れる場合については、適切な施工ができる体制を確保し、その体制について、元請の主任技術者等の場合は発注者、下請けの主任技術者の場合は元請又は上位下請けの了解を得ていれば、差し支えありません。

※（関東地整）「建設工事の適正な施工を確保するための建設業法」P11から引用

Q3-3

専任の技術者の設置が必要な2つの工事において、同一の主任技術者又は監理技術者を配置することができるか。

A: 主任技術者については、建設業法第26条第3項第1号又は建設業法施行令第27条第2項の要件を満たした場合、2つの工事において同一の主任技術者を配置することができます。

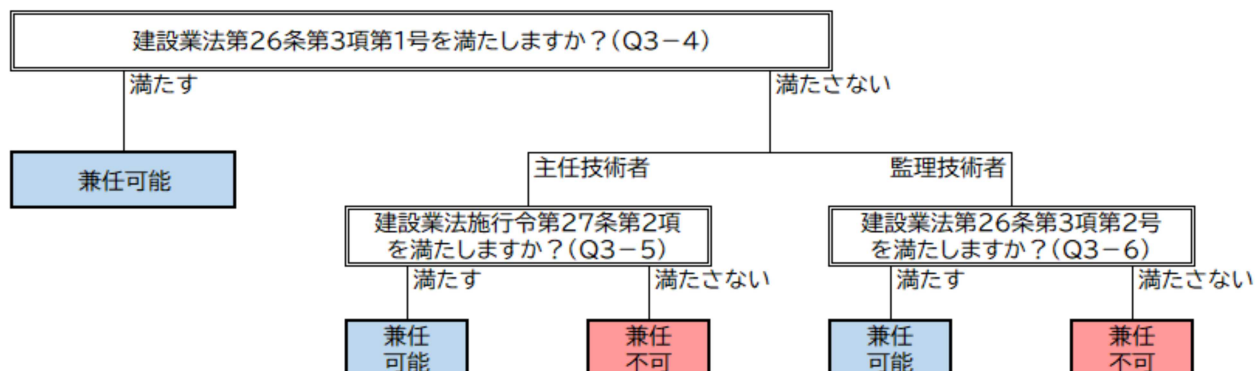
監理技術者については、建設業法第26条第3項第1号又は第2号の要件を満たした場合、2つの工事において同一の監理技術者を配置することができます。

ただし、すでに営業所の専任技術者と主任技術者等と兼任している場合は、2つの工事を兼任することは出来ません。

それぞれの要件については次のQ & Aに示していますので併せてご確認ください。

- ・建設業法第26条第3項第1号 ……Q3-4
- ・建設業法施行令第27条第2項 ……Q3-5
- ・建設業法第26条第3項第2号 ……Q3-6

また、そのほか、複数の工事を一つの工事とみなせる場合については、一人の主任技術者又は監理技術者による管理が可能です。(Q3-8)



Q3-4

Q3-3で示す建設業法第26条第3項第1号に基づく専任の主任技術者又は監理技術者が兼任できる要件とは何か。

A: 建設業法第26条第3項第1号(及び詳細については建設業法施行令第17条)で示されている以下の1~7の要件を全て満たした場合には、専任の主任技術者等の設置が必要な工事を2つまで、同一の主任技術者等によって管理することが可能です。

番号	要件	詳細
1	請負代金額	各工事の請負代金額が1億円(建築一式工事の場合は2億円)未満であること。
2	工事現場間の距離	建設工事の現場間の距離が、一日で巡回可能かつ、移動時間が片道概ね2時間以内であること。 なお、移動は自動車等の通常考えられる方法によること。
3	下請次数	各工事について、当該建設業者が注文者となった下請契約から数えて、下請次数が3次以下であること。
4	連絡員の設置	監理技術者等との連絡その他必要な措置を講ずるための者「連絡員」を設置すること。※1
5	情報通信技術による 施工体制の確認	当該工事現場の施工体制を確認できる情報通信技術の措置を講じていること。 情報通信技術については、現場作業員の入退場が遠隔から確認可能なものとし、CCUS又はその他同様の要件を満たすシステム等とすること。
6	情報通信技術による 現場状況の確認	工事現場以外の場所から現場状況を確認するために必要な、映像及び音声の送受信が可能な情報通信機器が設置され、かつ、当該機器を用いた通信を常時利用することが可能な環境が確保されていること。 なお機器については、一般的なスマートフォンやタブレット端末、WEB会議アプリ等の利用でも差し支えないが、山間部等の工事現場において、通信環境が不安定なことにより確実な通信環境が確保されていない場合は要件を満たさない。
7	計画書の 作成及び保存	人員の配置を示す計画書を作成し、各工事現場に備え置くこと。※2 なお、計画書は任意様式とし、電磁的記録によることが可能。

※1 土木一式工事又は建築一式工事の場合は、当該建設工事の種類に関する実務経験を1年以上有する者を配置。

※2 計画書参考様式：https://www.mlit.go.jp/tochi_fudousan_kensetsugyo/const/content/001851310.xlsx

Q3-5

Q3-3で示す建設業法施行令第27条に基づく専任の主任技術者が兼任できる要件とは何か。

A: 密接な関係のある2以上の建設工事を同一の建設業者が同一の場所又は近接した場所において施工する場合(下水道工事と区間の重なる道路工事を同一あるいは別々の主体が発注する場合など)は、同一の専任の主任技術者がこれらの建設工事を監理することができます。具体的には、次の(1)(2)の要件を共に満たす場合においては、2つの工事で同一の専任の主任技術者を配置することができます。

なお、この規定は、専任の監理技術者については適用されません。

(1) 対象となる工作物に一体性若しくは連続性が認められる工事又は施工にあたり相互に調整を要する工事

(2) 工事現場の相互の間隔が10km程度の工事

※施工にあたり相互に調整を要する工事については、資材の調達を一括で行う場合や工事の相当の部分を同一の下請で施工する場合等も含まれます。

Q3-6

Q3-3で示す建設業法第26号第3項第2号に基づく専任の監理技術者が兼任できる要件とは何か。

A: 監理技術者補佐をそれぞれの現場に専任で配置する場合は、同一の監理技術者が2つの工事を兼務することができます。ただし、次の要件のいずれかに該当する場合は、同一の監理技術者を2つの工事で兼務することはできません。

(1) 工事規模

工種	工事規模
一般土木、建築、電気、管	予定価格が3億円以上の工事
舗装	予定価格が6千万円以上の工事
その他	WTO対象の工事

(2) 技術的難易度

工種	工事規模
一般土木	予定価格が7千万円以上の総合評価落札方式入札で難易度Ⅳ以上(実績審査タイプを除く。)の工事
建築	予定価格が1億円以上の総合評価落札方式入札で難易度Ⅳ以上の工事
その他	標準型総合評価落札方式入札を行った工事

また、同一の管内又は工事現場間の移動時間が概ね2時間以内であれば、国・市町村等の他発注機関の工事との兼務についても可能ですが、あらかじめ各工事において兼務が認められているか発注者に対し確認が必要です。

Q3-7

監理技術者が工事を兼務しない場合でも補佐をつけることは可能か。

A: 配置することは可能ですが、建設業法上、監理技術者補佐とは認められません。

Q3-8

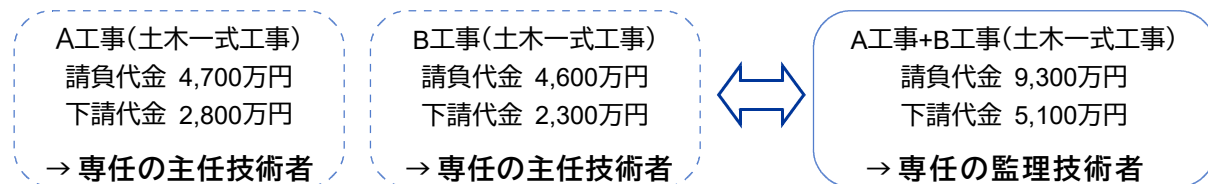
Q3-3で示す複数の工事を1つの工事と見なせる場合はどんな場合か。

A: 次の(1)(2)の要件をともに満たし、全ての注文者から同一工事として取り扱うことについて書面による承諾を得た場合は、これら複数の工事を一つの工事とみなして同一の主任技術者等が管理することができます。(監理技術者制度運用マニュアル三(2)④)

- (1) 同一あるいは別々の注文者が、同一の建設業者と締結する契約工期の重複するもの
- (2) それぞれの工事の対象が同一の建築物又は連続する工作物であるもの

この場合、当該複数工事を一つの工事とみなすため、下請金額の合計が5,000万円(建築一式工事の場合は8,000万円)以上となる場合は監理技術者を設置しなければなりません。

また、当該複数工事の請負代金額の合計が4,500万円(建築一式工事の場合は9,000万円)以上となる場合は、主任技術者又は監理技術者は専任の者でなければなりません。



Q3-9

工場製作工事において、同一工場内で他の同種工事に係る製作がある場合、主任技術者等は2つの工事にそれぞれ配置されなければならないか。

A: 橋梁、ポンプ、ゲート、エレベーター、発電機・配電盤の電機品等の工場製作工事全般において、同一工場内で他の同種工事に係る製作と一元的な管理体制のもとで製作を行うことが可能である場合、同一の主任技術者等が専任で2つの工事にあたるすることができます。

Q3-10

Q3-9における「一元的な管理体制」とは、どのようなことか。

A: 2つの工事それぞれの施工計画・設計協議・工程管理・品質管理・安全管理などについて、同一の技術者が効率的に行うことができる体制のことをいいます。

Q3-11

一次下請であるA社及びB社から当社は二次下請として契約したが、それぞれの請負金額が4,500万円未満である場合、主任技術者等は2つの工事を兼務してもよいか。

A: それぞれの請負金額が4,500万円未満ならば、どちらも専任になりません。ただし、適正な施工を確保することに、十分な配慮をすることが必要です。

Q3-12

営業所技術者又は特定営業所技術者は、専任の主任技術者や監理技術者として配置することは可能か。

A: 営業所技術者又は特定営業所技術者は、営業所に常勤(テレワークを行う場合を含む。)して専らその職務に従事することが求められ、所属営業所に常勤していることが原則ですが、次の①～③の要件を満たす場合は、特定営業所技術者は主任技術者又は監理技術者の職務を、営業所技術者は主任技術者の職務を兼ねることが可能です。

ただし、兼任した技術者がQ3-3及びQ3-5を活用して他の工事の主任技術者等(監理技術者補佐を含む。)になることはできません。

- ① 当該営業所において契約が締結された建設工事であること。
- ② 兼ねる工事現場の数が1以下であること。
- ③ Q3-4で示す1～7の要件を全て満たすこと。なお、2について、「建設工事の現場間」とあるのは「営業所と工事現場間」と読み替え、7については計画書に営業所の名称を追加で記載すること。
- ④ 当該建設業者と直接的かつ恒常的な雇用関係にあること。

Q3-13

営業所と工事現場が至近距離にあるため、営業所主任技術者又は特定営業所技術者を、専任を要しない主任技術者等として従事させることはできないか。

A: 営業所と工事現場が近接している場合は、次の(1)から(3)までの全てを満たす場合に、当該工事の専任を要しない主任技術者等となることができます。

ただし、Q3-11と併用することはできません。また、兼任した技術者がQ3-3及びQ3-5を活用して他の工事の主任技術者等(監理技術者補佐を含む。)になることはできません。

- (1) 当該営業所において請負契約が締結された建設工事であること。
- (2) 工事現場の職務に従事しながら実質的に営業所の職務にも従事しうる程度に工事現場と営業所が近接し、当該営業所との間で常時連絡を取りうる体制にあること。
- (3) 所属建設業者と直接的かつ恒常的な雇用関係にあること

また、営業所と工事現場が近接していない場合は、Q3-11で示す①～④を全て満たす場合に、専任を要しない主任技術者等となることができます。

なお、道が発注する工事は契約約款において現場代理人の常駐を求めています

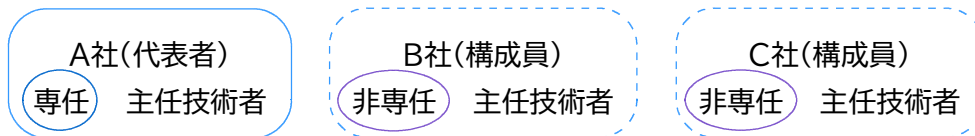
ので、主任技術者等が現場代理人を兼ねる際は、判断に当たり注意が必要です。

Q3-14

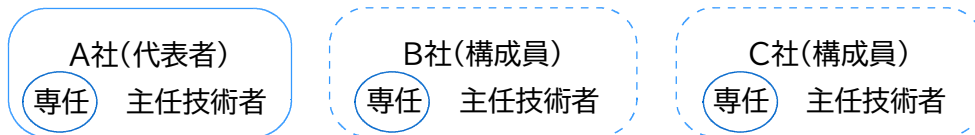
経常建設共同企業体の構成員は、代表者であるなしにかかわらず、どのような工事でも主任技術者等を専任で設置しなければならないか。

A: 全ての構成員が、主任技術者等を専任で設置してください。ただし、請負代金額が1億3,500万円(建築一式の場合は2億7,000万円)未満であれば、構成員の1者が主任技術者等を専任で設置できれば、その他の構成員は専任で配置する必要はありません。

(例) 請負代金額が1億3,500万円未満の一般土木工事の場合



(例) 請負代金額が1億3,500万円以上の一般土木工事の場合



Q3-15

経常建設共同企業体(乙型)の構成員は、それぞれの分担工事が稼働している期間のみそれぞれの主任技術者等を専任で設置することとしてよいか。

また、それぞれの分担工事の請負代金額によって、それぞれ主任技術者等を専任で設置することとしてよいか。

A: 請け負った工事をあらかじめ分割して各構成員がそれぞれの分担した工事について責任を持って施工する乙型共同企業体については、損益の計算について合同計算は行わないなど、分担工事のそれぞれが1つの工事と見なすことができる側面もあることから、各構成員の分担工事の実施期間について専任又は兼任で設置できればよいものとします。ただし、施工計画などについて、各構成員が十分な連携をとることが必要です。

また、設置する主任技術者等については、各構成員の分担工事の金額に応じて、専任又は兼任で設置できればよいものとします。

4. 主任技術者等の専任期間

Q4-1

発注者と他機関との調整のため、工事を一時中止している期間は、主任技術者等の専任を解除できるか。

A: 道から直接工事を請け負った建設業者が、主任技術者等を工事現場に専任で設置すべき期間は契約工期が基本となりますが、発注者の都合により一時中止した場合は、工事現場への専任は要しません。ただし、工事を中止する期間が、設計図書若しくは打合せ記録等の書面により明確になっていることが必要です。

Q4-2

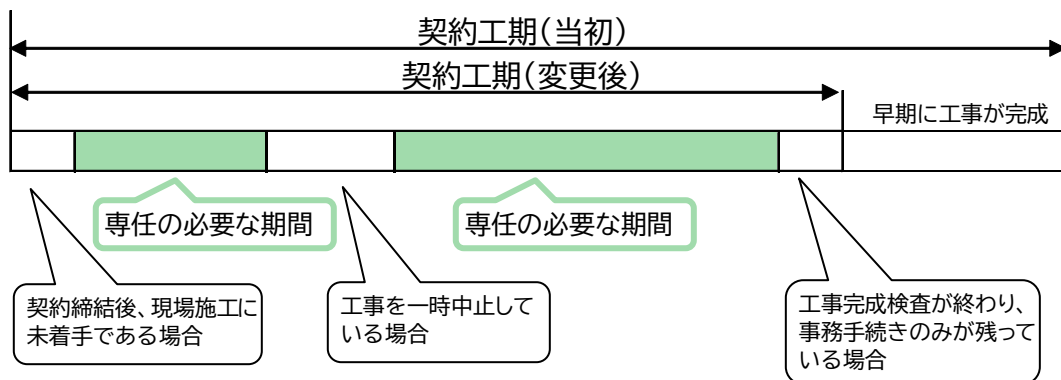
工事現場への立入調査や施工計画の立案等の工事準備に未着手の場合、又は工事が完成し完成検査と事務手続が残っている場合の当該期間は、主任技術者等の専任を要しないか。

A: 現場施工に未着手の場合は専任を要しません。この場合、未着手とは請負契約の締結後、現場施工に着手するまでの期間をいい、実際には、現場事務所の設置、資機材の搬入、又は建設工事が開始されるまでの期間をいいます。

なお、フレックス工期制による工事の場合においては、申し出た実工期の工事開始日を着手の日とみなします。

また、完成検査が終了し事務手続のみが残っている場合は、それ以降は専任を要しません。

「発注者から直接建設工事を請け負った場合」の専任期間

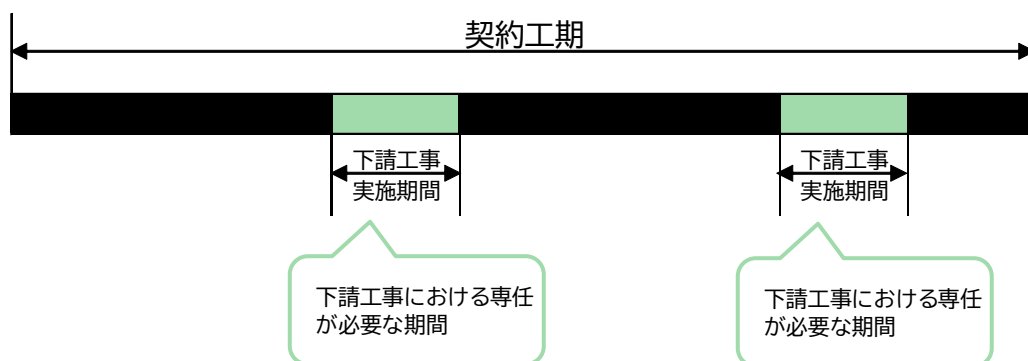


Q4-3

工事が2次下請業者まで下請けされているが、2次下請業者が工事を行っている期間は、1次下請業者の主任技術者等は専任していなくてもよいのか。

A: 1次下請業者の請負金額が4,500万円以上である場合は、自らが直接施工する工事が無い期間であっても、主任技術者等は現場に専任していなければなりません。

下請工事であっても主任技術者の専任が必要



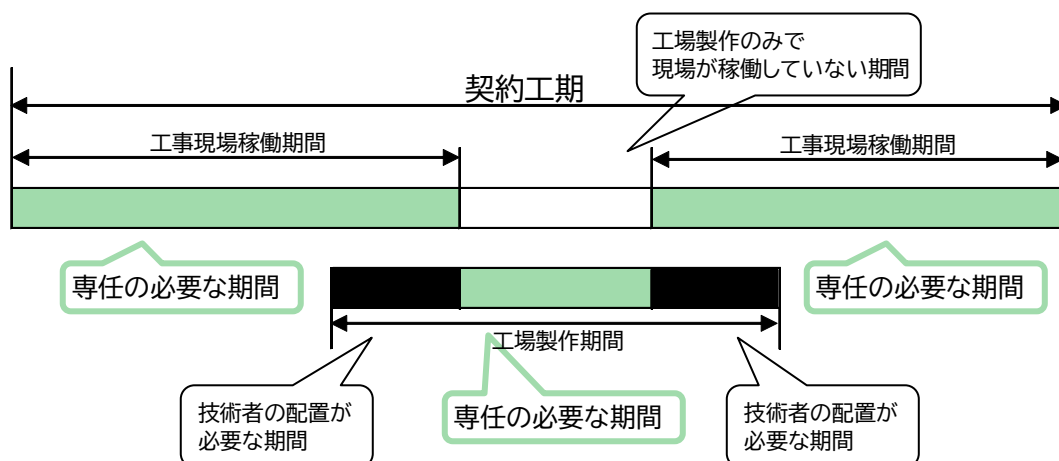
注意) 工事が3次下請業者まで下請けされている場合で、3次下請業者が作業を行っている場合は、1次・2次下請業者は、自らが直接施工する工事が無い場合であっても主任技術者は現場に専任していなければなりません。

Q4-4

工場製作を含んだ橋梁工事において、工場製作期間と現場における橋脚工事の期間が重複している場合、1人の主任技術者等の専任で構わないか。

A: 重複する期間中に専任技術者がどちらかの現場に張り付くと、工場製作現場と工事現場は離れていることから、当然、一方の現場は技術者が不在になってしまいますので、重複する期間は個々に技術者が必要になります。

なお、工場製作のみで現場が稼働していない期間が、設計図書、打合せ記録等の書面で明確にされている場合に限って、現場の技術者は専任を要しません。



Q4-5

工場製作を伴う工事として、橋梁工事の他にどのような工事が該当するのか。

A: 工事内容にもよりますが、下水道のプラント工事、エレベータ工事、門扉設置工事などの工場製作を伴う工事については、当該工場製作のみが稼働している期間は、橋梁工事と同様の取扱いが可能です。

Q4-6

維持工事等において長期間の契約工期となる場合、現場が稼働する時期があらかじめ特定されているものについては、フレックス工期制による工事の場合と同様の取扱いをしてもよいか。

A: 維持工事において、現場が稼働する以外の時期については、工事の準備・待機等の必要がないことが施工計画等により事前に明確な場合、フレックス工期制による工事と同様に現場が稼働している期間以外は、技術者の配置を要しない期間として扱うことが可能です。

5. 主任技術者等の交代

Q5-1

配置した技術者を、工事途中で変更することができるか。

また、変更できる場合、変更後の技術者についても3か月以上の雇用関係が必要なのか。必要な場合の3か月の始期はいつか。

A: 建設工事の適正な施工の確保を阻害する恐れがあることから、施工管理をつかさどっている監理技術者等の工期途中で交代は、当該工事における入札・契約手続きの公平性の確保を踏まえた上で、慎重かつ必要最小限とする必要がありますが、次の場合には変更が可能です。

- (1) 死亡、傷病、被災、出産、育児、介護又は退職等の場合
- (2) 受注者の責によらない契約事項の変更に伴う場合
- (3) 工場から現地へ工事の現場が移行する場合
- (4) 工事工程上技術者の交代が合理的な場合

いずれの場合も、交代の時期は工程上一定の区切りと認められる時点とするほか、交代前後における主任技術者等の技術力が同等以上に確保されるとともに、工事の規模・難易度等に応じ一定期間重複して工事現場に設置するなどの措置をとることにより、工事の継続性・品質確保等に支障がないと認められることが必要です。

また、変更後の技術者についても入札申し込みの日の3か月前からの雇用関係が必要です。

Q5-2

主任技術者等が死亡したため交代する必要が生じたが、当社には現在、交代できる技術者がいないため、新たな技術者を雇用し専任の主任技術者等としたいと考えているが、この場合、入札の申込みのあった日以前等に3か月以上の雇用関係のない技術者を配置してよいか。

A: 交代する技術者は、前技術者と同様に入札の申し込み前3か月以上の雇用関係にある者となりますが、そのような技術者がいない場合、変更の申請があり受理した時点で3か月以上の雇用関係にある者となります。それでも設問のように技術者がいない場合には、交代がやむを得ない理由によるものであって、工事の継続によって事業効果の早期発現が期待されるのであれば、3か月未満の新たな技術者への交代を認めます。ただし、この場合であっても前技術者と同等以上の技

術力を有する者を確保するよう努めることが必要です。

Q5-3

トンネル・ダム工事等の大型工事で、1つの契約工期が多年に及ぶ場合、1年単位で主任技術者等を交代させてよいか。

A: 工事の規模の大小にかかわらず一つの契約工期が多年に及ぶ場合、発注者と受注者との協議により、工事の規模、難易度等に応じ一定期間重複して工事現場に設置するなどの措置をとることにより、工事の継続性、品質確保等に支障がないと認められる場合は、1年という期間に捉われず工程上一定の区切りと認められる時点において交代を認めます。

Q5-4

専任の主任技術者等が短期間現場を離れる場合、発注者との協議が不要なケースは、どのような場合か。

A: 社会的な規範から判断して、次のような理由により1～2日程度現場を離れる場合については、発注者との協議は不要です。

ただし、連続して3日以上期間現場を離れる場合、終日現場を離れている状況が週の稼働日の半数以上となる場合又は周期的に現場を離れる場合については、適切な施工ができる体制を確保するとともに、その体制については、発注者と協議のうえ、協議簿等により処理する必要があります。

なお、いずれの場合においても、現場が施工中の場合には、リアルタイムの映像・音声による通信手段の確保や、職務の代行が可能な技術者の配置など、請負業者として施工管理、安全管理に十分配慮し、適切な施工ができる体制を確保することが必要です。

(現場を離れる理由の例)

- ・当該工事に関する打合せや書類作成等の業務
- ・技術研鑽のための研修、講習、試験等への参加
- ・社内の安全会議
- ・お盆、年末年始
- ・通院、短期の入院
- ・冠婚葬祭
- ・企業が定めた休暇等

Q5-5

専任の監理技術者が、新たに受注した他の工事の監理技術者を兼務することとなった場合は途中交代となるか。

また、届出は必要か。

A: 監理技術者の専任から兼任、又は兼任から専任への変更は、監理技術者の途中交代にはあたりません。

ただし、監理技術者が専任から兼任に変わり、監理技術者補佐を新たに専任で設置する場合は、施工体制が変更となりますので、新たに受注した工事の契約締

結後、速やかに、現場代理人等変更通知書及び変更後の施工体制台帳の写しを提出してください。

6. 現場代理人

Q6-1

現場代理人の職務及び資格要件は何か。

A: 現場代理人は、請負契約の履行に関して工事現場に常駐し、その運営、取締りを行うほか、請負代金額の変更・請求・受領及び契約の解除など重要事項を除いて、この契約に基づく受注者の一切の任務を代行する者で、施工技術上の管理をつかさどる主任技術者等と違う役割を担うものであり、特段の資格を必要とはしていません。

なお、現場代理人が主任技術者又は監理技術者としての資格を持っている場合は、兼務することが可能です。

Q6-2

人材派遣会社から派遣された社員を現場代理人とすることができるか。

A: 主任技術者又は監理技術者と兼任しないで単独で配置される現場代理人の場合は、現場代理人に関する要件を法などで定めていないことから、派遣社員でも可能です。ただし、より適正な施工体制の確保を図るため、現場代理人についても直接的な雇用関係にある者を設置するよう発注者として要請してください。

なお、要請に応じず派遣社員が現場代理人となった場合は、派遣契約や代理契約等について確認する必要があります。

Q6-3

主任技術者等と現場代理人とは同一の場合が多いが、短期間であれば現場を離れても現場代理人交代手続をとらず、協議簿処理でよいケースは、どのような場合か。

A: 現場代理人は、常時、発注者との連絡に支障をきたさないよう、工事現場への常駐が義務付けられており、主任技術者等が現場代理人を兼ねる場合も同様の扱いとなります。

ただし、工事現場における運営、取締り及び権限の行使に支障がなく、かつ、発注者との連絡体制が確保されると発注者が認めた場合は、協議簿等を作成することにより、例外的に常駐を要しないこととすることができます。

具体的にどのような場合に常駐義務を緩和するかについては、工事の規模・内容等に応じた運営、取締り等の難易度を踏まえて発注者が判断することになります。

Q6-4

発注者と他機関との調整等のため、工事を一時中止している期間や工事の完成(完成届提出)後、引渡完了までの間、他の工事の現場代理人になることができるか。

A: 契約約款において、現場代理人は工事現場に常駐することとしています。これ

は、当該契約に係る作業期間中、常に工事現場に滞在し、発注者等との連絡に支障を来さないようにすることを目的としているものですが、工事を中止する期間が設計図書若しくは打合せ記録等の書面により明確になっている場合で、かつ現場管理が十分に行われていると認められる場合は、他の工事の現場代理人となることを認めます。

また、作業を完了し工事が完成(完成届提出)した後は、常駐する必要はありませんが、検査及び引渡が行われていないことから受注者としての善管注意義務は残っており、事務手続や発注者との連絡などに支障を来さないよう留意が必要です。

なお、現場代理人が主任・監理技術者を兼任している場合は、「常駐」の要否とは別に専任期間(検査終了まで)を確保する必要があります。

Q6-5

契約約款には、「現場代理人の工事現場における運営及び取締りに支障がなく、かつ、発注者との連絡体制が確保されると認められた場合には、工事現場に置ける常駐を要しないこととすることができる」とあるが、具体的には、どのような場合か。

A: Q6-4のほか、次の期間については、常駐を要しません。

- 1 契約締結後、現場事務所の設置、資機材の搬入又は仮設工事等が開始されるまでの期間。
- 2 橋梁、ポンプ、ゲート、エレベーター等の工場製作を含む工事であって、工場製作のみが行われている期間。
- 3 上記以外で、工事現場において作業等が行われていない期間。

Q6-6

現場代理人が、他の工事の現場代理人を兼任することができるときは、どのような場合か。

A: 工事現場における運営及び取締りに支障がなく、かつ、発注者との連絡が確保されると認められる場合であり、次の(1)又は(2)を満たす工事で、現場代理人を兼任することができます。

(1) 次のアからウの基準を満たす場合は、2件若しくは3件の工事で現場代理人を兼任できるものとする。

ア 請負代金額が4,500万円未満の工事であること(建築工事は8,000万円未満)。

イ 工事現場が原則、同一市町村内であること。

ウ 公共工事であること(他発注機関の工事との兼任の場合は、他発注機関が兼任を認めている場合に限る。)

(2) 建設業法施行令第27条第2項により密接な関係のある工事について同一の専任の主任技術者が管理できるとされた2件若しくは3件の工事で現場代理人を兼任できるものとする。

なお、基準を満たす場合であっても、それぞれの工事に受注者の社員等で確実に連絡が可能である連絡員を定め、現場代理人が現場を離れる場合は、連絡員を

工事現場に配置し、発注者との連絡に支障がないよう万全を期すことや、兼任時においても、それぞれの工事における現場代理人としての職務は適切に執行することが必要です。

Q6-7

「現場代理人の兼任に関する取扱い」において、兼任の条件として、「受注者は現場代理人を兼任するそれぞれの工事に受注者の社員等で確実に連絡が可能である連絡員を定め」とあるが、社員等の「等」とは何を指すのか。

A: 社員のほか、受注者の役員を配置可能としたものです。

Q6-8

専任の主任技術者の設置が必要な工事で、専任の主任技術者が現場代理人を兼ねている場合は、他の工事現場代理人を兼任することはできないのか。

また、専任の主任技術者を兼ねていない現場代理人が、他の工事の現場代理人を兼任することはできるのか。

A: 専任の主任技術者の設置が必要となる4,500万円以上の工事の場合の現場代理人の兼任は、主任技術者と現場代理人の兼務の有無に関わらず、建設業法施行令第27条第2項により密接な関係のある工事について同一の専任の主任技術者が管理できるとされた2件若しくは3件の工事に限り、現場代理人を兼任することが可能です。

このことから、問の前段、後段ともに、上記の場合のみ、兼任が可能となります。

Q6-9

建設業法施行令第27条第2項により密接な関係のある工事について同一の専任の主任技術者が管理できるされた2件の工事で現場代理人を兼任しているが、1件において監理技術者の設置が必要な工事となった場合は、現場代理人を兼任できるか。

A: 建設業法施行令第27条第2項(以下「施行令」という。)の規定については、監理技術者には適用されないことから、それぞれの工事で専任の技術者を配置しなければならないものであり、施行令の規定が適用されなくなったことにより、現場代理人についても、それぞれの工事での配置が必要となります。

Q6-10

監理技術者が現場代理人を兼ねている場合は、他の工事の現場代理人を兼任することはできないのか。

また、監理技術者を兼ねていない現場代理人を他の工事の現場代理人と兼任することはできるのか。

A: 現場代理人が他の工事の現場代理人を兼任することができる基準を、請負代金

額が4,500万円未満の工事としているところであり、監理技術者の設置が必要な工事は、発注者から直接工事を請け負い、そのうち5,000万円(建築工事業の場合は、8,000万円)以上を下請契約して工事を施工するものであることから、監理技術者と現場代理人を兼ねているかどうかに関わらず現場代理人を兼任することはできません。

Q6-11

道の工事における現場代理人と道以外の地方公共団体等の工事の現場代理人を兼任することは可能か。

A: 「現場代理人の兼任に関する取扱いについて」の基準等を満たし、他の地方公共団体等が兼任を認めている場合は兼任が可能です。

Q6-12

4,500万円未満の工事で、工事場所が同一市町村内にある、道発注工事2件を同時に受注したが、2件の工事について一人の現場代理人が兼任することは可能か。

A: 「現場代理人の兼任に関する取扱いについて」の基準を満たしていると考えられ、現場代理人の兼任は可能です。

なお、基準を満たす場合であっても、それぞれの工事に受注者の社員等で確実に連絡が可能である連絡員を定め、現場代理人が現場を離れる場合は、連絡員を工事現場に配置し、発注者との連絡に支障がないよう万全を期すことや、兼任時においても、それぞれの工事における現場代理人としての職務は適切に執行することが必要となります。

Q6-13

現場代理人を兼任させようとする場合は、「現場代理人の兼任届」を支出負担行為担当者に提出することとなっているが、提出先はどこか。

A: 「現場代理人の兼任届」の提出を受け、総括監督員が基準を満たすかどうかを判断するため、工事監督員に提出することとなります。

Q6-14

現場代理人が監理技術者補佐を兼ねることは可能か。

A: 可能です。

Q6-15

現場代理人が、2つの工事を兼任する監理技術者を兼ねることは可能か。

A: 現場代理人と技術者の兼務については、「現場代理人の兼任に関する取扱い」に限られますので、監理技術者が他の監理技術者と兼任する場合は、原則、監理技術者と現場代理人は兼務できません。

Q6-16

監理技術者が現場代理人を兼ねている場合で、新たに他の工事の監理技術者を兼任する場合は引き続き現場代理人を兼ねることは可能か。

A: Q6-15と同様の取扱いとなります。

なお、この場合は、別に現場代理人を置くか、新たに配置する監理技術者補佐が兼務することとしてください。

Q6-17

監理技術者補佐を配置した場合における現場代理人の兼務について、次の事例の場合は兼務を認められるか。

- ・事例1 工事① 監理技術者A 監理技術者補佐B 現場代理人A
 工事② 監理技術者A 監理技術者補佐C 現場代理人A
- ・事例2 工事① 監理技術者A 監理技術者補佐B 現場代理人B
 工事② 監理技術者A 監理技術者補佐C 現場代理人C
- ・事例3 工事① 監理技術者A 監理技術者補佐B 現場代理人A
 工事② 監理技術者A 監理技術者補佐C 現場代理人C

A: ・事例1～現場代理人は2つの現場を兼務できないため、認められません。

・事例2～認められます。

・事例3～監理技術者と現場代理人は兼務できないため、認められません。

7. 下請負

Q7-1

警備会社と契約し交通整理員の派遣を受けたが、これは下請契約となるか。

A: 交通整理業務は、建設業法第2条第1項で規定する「建設工事」には該当せず、また、建設業法第2条第4項では、「「下請契約」とは、建設工事を他の者から請け負った建設業を営む者と他の建設業を営む者との間で当該建設工事の全部又は一部について締結される請負契約をいう。」と規定されており、建設工事の請負契約には当たらないため、下請契約とはなりません。

・ 下請契約とはならない例としては、

交通整理業務、清掃業務、賄い、建設資材の輸送、生コンの輸送、土砂等の運搬、建設機械のリースの契約などがあります。

・ 下請契約となる例としては、

オペレータ付きのコンクリートポンプ・クレーン作業、生コンの輸送にとどまらずコンクリート型枠への圧送や打設、土砂の運搬にとどまらず積み込み作業を含む契約などがあります。

Q7-2

舗装工事などで広く用いられているオペレーター付きリース契約は、下請契約となるか。

A: 舗装工事は、建設業法第2条第1項で規定する「建設工事」に該当し、また、リー

ス契約であっても、建設業法第24条では、「委託その他いかなる名義をもってするかを問わず、報酬を得て建設工事の完成を目的として締結する契約は、建設工事の請負契約とみなして、この法律の規定を適用する。」とされており、建設業法第2条第4項で定める下請契約になります。

なお、労働者派遣法第4条において、労働者派遣法の適用除外となる業務として「建設業務(土木、建築その他工作物の建設、改造、保存、修理、変更、破壊若しくは解体の作業又はこれらの作業の準備の作業に係る業務をいう。)」とされているので、この契約について、下請契約をせずに行う場合は、労働者派遣法違反となるおそれがあります。

Q7-3

ダンプトラックによる残土搬出作業を契約したが、下請契約となるか。

A: 残土搬出作業だけであれば下請契約に当たりません。ただし、積み込み作業等の建設業法の請負工事に当たる部分を包括する契約内容であれば、下請負となりますので、この契約について下請契約とせずに行う場合は、労働者派遣法違反となるおそれがあります。

Q7-4

他の建設会社から作業員の労務提供を受けたが、これは下請契約となるか。

A: 警備や清掃などの単なる労務提供ではなく、建設工事の完成を目的とした作業を請け負わせる場合は請負契約に当たるため、適正な下請契約を行ってください。

下請契約をせずに行う場合、建設業務は、労働者派遣事業の適用除外と規定されている労働者派遣法に違反するおそれがあります。

Q7-5

資材メーカーにブロックの製造と、資材置き場までの搬入を内容とする契約をしたが、これは下請契約となるか。

また、資材置き場までの搬入ではなく、トラッククレーンによる現場へのブロック設置までを内容とする契約をした。この場合、下請負契約となるか。

A: 資材置き場までの搬入は下請契約に当たりません。ただし、設置作業等、建設業法の請負工事に当たる部分を包括するものであれば下請契約となりますので、この場合、資材置き場までの搬入を超えて施工現場へのブロック設置を行う場合は、下請契約となります。

Q7-6

同一入札参加者と下請契約を締結することはできるか。

A: 同一入札参加者への下請けは、談合を誘発するのではという疑念や丸投げなど、事前の利益供与も可能となり、適正な競争入札を阻害する要因となります。発注者としては、真にやむを得ない場合を除き、同一入札参加者への下請けにつ

いては、極力避けるよう指導する必要があります。

なお、真にやむを得ない場合として下請契約を締結した際は、建設業法や適正化法の規定に基づき現場における施工体制の確認を行うなど十分に配慮してください。

また、真にやむを得ない場合とは、特殊な機械（船員付の起重機兼グラブ船・クレーン付台船・台船・浚渫船）で、リース物件として市場で調達できない場合等が挙げられます。

Q7-7

協力会社に工事への協力を求める場合も下請届けは必要か。

A: 協力会社といえども別会社であることから、下請契約を締結し、届け出等を行う必要があります。

Q7-8

共同企業体を下請とした契約を締結することはできるか。

A: 公共事業において活用している共同企業体制度は、発注者から直接工事を請け負う元請としての共同企業体を想定したものです。下請が共同企業体であることについては法的な規制があるものではありませんが、施工技術上の必然性もないなど合理的な説明が困難であることから、共同企業体と下請契約するのではなく、それぞれの建設業者と下請契約を締結することが必要です。

Q7-9

3社で共同企業体を組んでいるが、その構成員へ下請けさせることは問題があるのか。

A: このような下請契約には、共同企業体の構成員としての会社と下請業者としての会社との契約が存在しており、同一企業が同一契約において双方の当事者となる自己契約に該当します。直ちに建設業法違反となるものではありませんが、このような契約は、出資比率に比べて一構成員が施工の多くを手がけることとなるため、実態上は共同企業体制度の趣旨に反し、また、一括下請負に該当するなどの建設業法違反となるおそれが高く、他の構成員の実質的な関与を担保する手段がないため、適当ではありません。

このような契約は、基本的には締結すべきではなく、例えば、一の構成員が特殊工法を有している等により担当範囲が多くなると予想される場合には、当該構成員の出資比率を当該担当範囲に見合うよう出資比率を設定すべきです。

Q7-10

上請けは禁止されているのか。

A: 上請けとは同業種の上位規模の会社に施工させることを指し、一律禁止されているものではありませんが、上請けは一般的に一括下請負につながりやすいため、その的確な排除が必要であり、配置予定技術者の確認、施工体制台帳の活用

等により元請業者としての実質的関与の確認などに十分留意してください。

8. 一括下請負

Q8-1

一括下請負とは何か。

A: 受注者が自己の請け負った建設工事をそのまま一括して下請けさせることは、発注者の信頼に反するばかりでなく、工事施工上の責任の所在を不明確にし、工事の適正な施工を妨げられることから、建設業法や入札契約適正化法で禁止されています。

次のような場合が典型的な例で、元請負人がその下請工事の施工に実質的に関与している場合を除き、一括下請負に該当します。

① 請け負った建設工事の全部又はその主たる部分について、自らは施工を行わず、一括して他の業者に請け負わせる場合。

② 請け負った建設工事の一部分であって、他の部分から独立してその機能を発揮する工作物の建設工事について、自らは施工を行わず、一括して他の業者に請け負わせる場合。

Q8-2

外注の比率が何%なら一括下請負となるのか。

A: 比率や金額で一括下請負の疑義があるというものではなく、請け負った工事に実質的に関与しているかどうかで判断します。

Q8-3

工事の中に含まれる特殊工事を専門工事業者に下請けさせることは、一括下請負となるのか。

A: 元請業者が実質的に関与していれば一括下請負にはなりません。

Q8-4

元請が実質的な関与とはどこまでの範囲をいうのか。

A: 元請負人と直接的かつ恒常的な雇用関係を有する的確な主任技術者又は監理技術者を配置し、①発注者との協議、②住民への説明、③官公庁等への届出等、④近隣工事との調整、⑤施工計画、⑥工程管理、⑦出来形・品質管理、⑧完成検査、⑨安全管理、⑩下請業者の施工調整・指導監督等の全ての面において、主体的な役割を果たしていることが必要で、単に技術者を置いているだけでは「実質的に関与している」とはいえません。

Q8-5

元請が実質的に関与していることの確認は、どのような方法で行うのか。

A: 「実質的に関与」とは、元請負人が自ら施工計画の作成、工程管理、品質管理、技術的指導等を行うことです。

具体的には、請け負った工事全体について、施工計画書等の作成、進捗確認、立会確認、技術者の配置等法令遵守、その他所定の全ての事項を行うことが必要です。

また、単に現場に技術者を置いているだけでは具体的な事項を行ったことにはならず、元請負人との間に直接的かつ恒常的な雇用関係を有する適格な技術者が置かれなければならない場合には「実質的に関与」しているとはいえません。

Q8-6

元請から1次、2次、3次下請までである場合、一括下請負が禁止される範囲はどこまでか。

A: 一括下請負が禁止されている範囲には制限がなく、Q8-1に該当するような場合は、二次下請と三次下請の間でも一括下請負と認定される場合があります。

Q8-7

元請負人が現場管理と資機材の手配供給のみを行い、実質の施工を全て下請けした場合、一括下請負と判断されるか。

A: 元請負人が、請け負った工事全体について、施工計画書等の作成、進捗確認、立会確認、技術者の配置等法令遵守、その他所定の全ての事項を行う必要がありますので、現場管理と資機材の手配供給のみしか行っていないのであれば、「実質的に関与」していると言えず、一括下請負に該当すると考えられます。

Q8-8

施工管理、工程管理などの全てに関与することによって、一括下請負に該当しないとあるが、その「全て」のうち1つでも行わなかった場合は、一括下請負と判断されるのか。

A: Q8-4及びQ8-7のとおり、請け負った工事全体について、施工計画書等の作成、進捗確認、立会確認、技術者の配置等法令遵守、その他所定の全ての事項を行い「実質的に関与」することが必要です。

工事を施工管理する中で、一部分だけを行わないとは考え難く、例えば、安全管理を行わなかった場合は、それに関連して、施工計画、工程管理、下請への指導監督等についても関与していない場合が多いと考えられ、全てに関与することが必要です。

9. 施工体制台帳等

Q9-1

施工体制台帳は、少額の契約のものや、施工期間の極めて短いものでも全て作成する必要があるか。

A: 入札契約適正化法の規定により、公共工事の受注者は、下請金額にかかわらず施工体制台帳を作成し、作成した施工体制台帳の写しを発注者に提出しなければなりません。

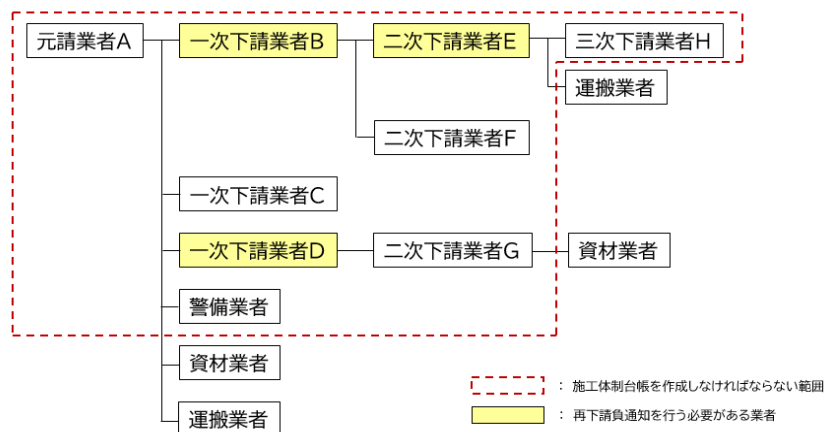
なお、道では施工体制の明確化などのため、請負金額200万円以上の工事及び200万円未満であっても下請契約を締結する工事について、施工体制台帳の提出を求めており、「施工体制点検・確認」の対象工事となります。

Q9-2

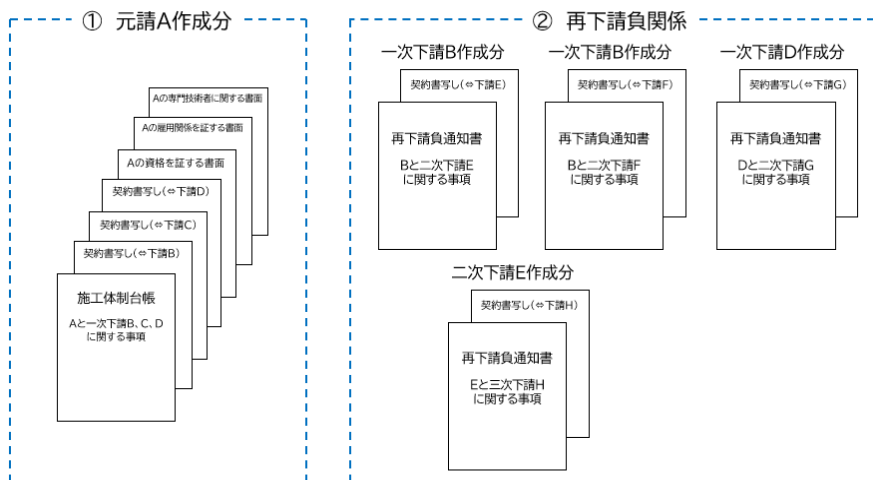
施工体制台帳等に記載する下請負人の範囲はどこまでか。

A: 施工体制台帳等に記載すべき下請負人の範囲は、建設工事の請負契約における全ての下請負人(建設業許可を有しない者を含む。)をいい、資材納入、調査業務、運搬業務、警備業務等の建設工事以外の契約は記載不要です。

また、一次下請だけでなく二次下請、三次下請等も施工体制台帳への記載対象となります。ただし、交通誘導業務及び農業土木における客土の運搬については、施工管理に密接に関わるため、記載してください。



①と②を併せたものが、施工体制台帳となります。



Q9-3

施工体制台帳への下請契約の記載は、全ての下請業者とされているが、3次、4次の業者は契約書を交わしていない業者がほとんどであり、全ての下請業者を記載すると書類提出が遅れることになるが、1次までの記載ではだめなのか。

A: 施工体制台帳の作成を義務付けている主旨は、一括下請負の禁止のみにとどまらず、工事の施工に当たる全ての業者を発注者及び元請負人において把握・監督させることによって、建設工事の適正な施工を確保することにあります。

また、建設業法第19条では、建設工事の請負契約の内容については、書面化し、署名又は記名押印をして相互に交付しなければならないことになっているので、設問のような場合は、書面契約を行うよう指導するのが元請業者としての責務となります。

Q9-4

専門工事業者と取り引きする際に、専門工事請負基本契約約款により契約を締結しているが、各工事の請負代金額が100万円未満の場合、基本契約約款に基づき請求書を受領し、請求代金を支払っているのに、施工体制台帳には契約書なしと記載してよいか。

A: 設問のような場合であっても、建設業法第19条により、建設工事の請負契約の内容については、書面化し、署名又は記名押印をして相互に交付する必要があります。

Q9-5

作業員名簿は施工体制台帳に添付しなければいけないか。
また、下請業者を含む全員の名簿を作成しなければならないか。

A: 作業員名簿は、施工体制台帳の一部として建設業法施行規則に定められています。

また、「建設工事に従事する者に関する事項」を記載することが義務付けられていますので、下請業者を含む名簿を作成してください。

Q9-6

施工体系図は、工事関係者・公衆が見やすい場所に掲示することとされているが、施工体系がなかなか決まらなかったり、変更が多くあったりする。施工体系図は工事施工後すぐに掲示しなければならないか。

また、変更がある場合はすぐに訂正し貼り替えなければならないか。

A: 施工体制台帳は、建設業法施行規則により、変更があったときは遅滞なく変更後の当該事項を記載することとされており、施工体系図が施工体制台帳に基づいて作成されることを考えると、施工体系図も遅滞なく変更後の当該事項を記載するよう努めてください。